

	<p>2014年 1月15日 第100号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会  <a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>  E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>  〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	---

## 講演会 「身近な野鳥達の都市生活」から

1月30日、都市鳥研究会代表で日本野鳥の会東京支部の川内博先生を講師に迎えて、野鳥たちの現状をお話しいただきました。先生がヨーロッパ旅行で体験された、パリの公園の身近な野鳥については山田元一郎さんが報告されているので、断片的ですが先生のお話しと板橋区内で見かける野鳥について、私が感じたことを書いてみました。

### オナガガモが減った

川内先生によると、渡り鳥のカモ類が少なくなったそうです。とくにオナガガモが減っているそうです。繁殖地はユーラシアと北米大陸で、秋に海を渡ってやってきます。カモ類は、日本に渡って来たばかりは、オス、メスの区別がつきにくいのですが、やがて生殖羽に変わり、相手を見つけて、春になるとつがいいで北に渡って繁殖します。オナガガモのオス（繁殖羽）は、頭が茶色、胸が白く尾がピンと長いのが特徴です。メスは地味な色のままですが、カップルで泳いでいるので、メスでもなんとなくオナガガモとわかります。冬鳥として寒い地方から渡ってくるカモ



類にはオナガガモの他にヒドリガモ、キンクロハジロ、ホシハジロなどがいて、水面に浮かぶカモ達は、木の枝葉に隠れている野鳥と違って見つけやすく、識別しやすいのがいいですね。

浮間公園でエサに群がる水鳥。オナガガモは左端中央、中央上、左下に見え、右上にユリカモメ。他にホシハジロ、キンクロハジロ。地味な鳥がメス。

当然のようにカモ達は人に愛され、エサをもらえる。まちなかの公園では池のそばに立つとエサを期待してカモ達が寄ってきます。カモは狩猟鳥獣ですが、都会では襲われないと知っているのでしょう、まったく人をおそれません。二十数年前の冬、不忍池はカモであふれるばかりで、たくさんのカモが陸に上がり、足元に寄ってくるのにびっくりしましたが、今は陸に上がっているカモを見ても誰も驚きません。その不忍池もカモが非常に少ないそうです。繁殖地での変化はなく、日本に飛来する数は変わらないとされているので、東京の公園で数が減っている理由がわからないそうです。浮間公園に行くと、たくさんのカモがいますが、たしかに以前はこんな数じゃなかった、それに圧倒的にオナガガモが多く、水面を覆うばかりに浮かんでいました。

## エサがあるところに鳥たちがいる

先日谷津干潟に行きました。ここはラムサール条約で登録された湿地です。いろいろな水鳥をいっぱい見られると思って潮位を調べて行ったのですが、それほどでもなくて拍子抜けしました。鳥口密度は、浮間公園の方が高いのでは、と思います。まちなかの公園では、人が入れ替わり立ち替わりエサを撒いているので、水鳥がいるということ。これを「自然度が高い」とは言えないのではないのでしょうか。

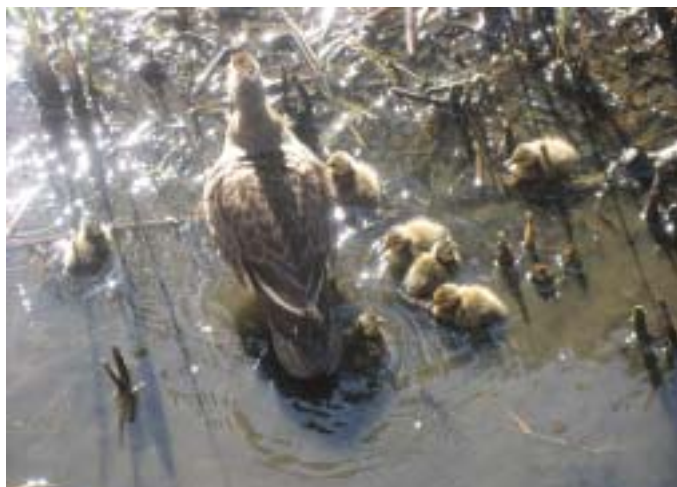
先生によると、カラスは東京都が捕獲をはじめた平成13年度の38000羽から数年で生息数は半減したが、捕獲を続けているにもかかわらず、それ以上減少せずに生息数は横ばい。減らないのはエサに困らないからですね。ユリカモメは生ごみが全量焼却処理され、埋め立てされなくなってから減少、ドバトもエサやりが禁止されて浅草でもあまり見かけなくなったそうです。先生は「ユリカモメもドバトもあまり見ないでしょう?」と言われましたが、板橋ではドバトもいるし、浮間公園には数は多くないですがユリカモメが来てエサをもらっていました(1頁の写真)。エサが断たれた場所からはいなくなっても、もらえるところにはいるのでしょうか。これはうれしいことなのでしょうか。みなさんはどう思われますか。

## カルガモは増えているような気がしませんか

カルガモはオナガガモ達と違って留鳥で、日本で繁殖します。

昨年春ため池で12羽が生まれ、保育園の子ども達が並んでカモのヒナを見ていました。ちいさなヒナは本当にかわいい。外敵にも襲われずに無事に育ったようです。一昨年もため池で生まれたカルガモ12羽が育ったそうです。

平和公園にあるコンクリートの小さな普通の池に、昨年カルガモが卵を産んだ、という話が伝わってきました。公園課がつくった産卵用の小屋のようなものがあり、カモが4羽いて、人がエサをやっていました。この小さな池でカルガモのヒナが11羽孵り、1羽が子供のいたずらで死に、その後もう1羽が死んで、9羽が大きくなった。何も無い池なのに、



浮間公園のカルガモの親子(2007年6月)



昼間は21羽とか25羽が来ます。そして夜になると見次公園に飛び立つという話を聞きました。おじさんが来てパンをやり始めるとハトも群がり、フライングキャッチするのもしました。カルガモたちは、夜は広い見次公園の水辺で休み、昼間は人がいてエサがもらえ、安全な平和公園に出勤するらしい。そのおこぼれをちょうだいするドバトも集合しているようです。

以前、石神井川でカルガモが産卵し、あるいは他で産卵してエサの多い石神井川に引っ

写真上：平和公園の小さな池に来るカルガモ

写真右：公園のベンチで読書する人がある静かな風景。次のエサを待ってハトたちも静かに羽根を休めている(平和公園 11月29日)



越して泳いでいるのをよく見ました。10羽ほどいたヒナが、カラスに襲われたり、増水で流されたりして2、3羽になった、とはらはらしながら見守り、ヒナが無事に育ててほしいと願っていました。石神井川を見る機会が減りましたが、同じ状況かもしれません。赤塚溜池のカルガモも以前は猫やカラスにやられていました。今は、これが野生生物の普通の姿だと思います。

カルガモの生存率が上がったとすれば、カラスが減ったためでしょうか、カルガモが人の集まる場所のメリットを認識したためでしょうか。

カルガモにも縄張りがあると思いますが、ため池などで無事に育ったたくさんのカモ達は、巣立ったあと居場所はあるのでしょうか。

豊かな自然環境の証明であったオオタカも都会で繁殖しており、人のいるところに営業し、人間のそばにいることによって、卵やヒナを守っているようだ、ということでした。

カルガモやオオタカも、先生によると、「ツバメ型繁殖戦略」をとる鳥になります。ツバメは昔から益鳥として保護され、安心して人家の軒先に巣を作って、外敵から卵やヒナを守っているからです。オオタカも人間を意識し、都市に適応した都市鳥になってきたということです。

## カルガモとトンボ池の憂鬱

さて、私達が管理しているトンボ池にも以前からカルガモは来ていました。お目当てはカエルの卵でした。カエルの卵が忽然と消えてしまった原因は、子ども達の他にカルガモがすっかり食い尽くしたからだとわかりました。

昨年は、池が半分干上がって、カエルの卵もオタマジャクシも見られましたが、その間、カルガモも常駐するようになりました。食べ残した卵



浅くてもオタマジャクシや水草の芽を食べにきたカルガモ  
(2013年4月)

から孵ったオタマジャクシや、小さいザリガニ、浅くなって出てきた水草の芽など、コンクリの池よりもずっと自然度の高いトンボ池は、カルガモにとってもよいエサ場です。一方、カルガモが毎日来る中で、生き延びて上陸したメマガエルは数十匹位。ヒキガエルは一度に5000個位の卵を産むと聞きました。卵塊は5、6塊あったので、2万個以上の卵のほとんどが、カルガモの餌になり、子供のおもちゃになって、カエルになれなかったのです。自然だからそれでもよいのですが、消えた命があわれに思えます。そういう私だって、たくさんの命を食べています。

ところで、カルガモがトンボ池を気に入り、ここで卵を生み、育てるかもしれません。そうなったら多くの方が喜び、あふれんばかりの愛情を注ぐでしょう。カルガモは野生生物というより、もうペットです。それを考えると憂鬱です。

トンボ池のような自然の池が大切だと思う人は多い。

行政も多くの人も、「子ども達がザリガニやオタマジャクシをとって遊び、カルガモが卵を生み、ヒナが、安心して泳ぐ自然の池」を希望されるのでしょうか。**都会の自然とは、自然とふれあう場所、子供が生き物をつかまえて遊び、人は動植物をながめ、かわいがって癒される場所だ、ということなのでしょう。それでよいのでしょうか。**

前号(みずみどり99号)に瀬田さんが紹介した講演会「ビオトープと荒川生態園」の報告では、講師の佐々木寧先生が、「・・・生態学では「おかげさま」が大切だと思っている。不特定多数のおかげさま、自然からもらっているたくさんの感じ得ないものへのおかげさまが大切で、ダンゴムシもいらぬものではない。ちゃんと分解をしてくれている。空気や水は自然からもらっている。蚊やダンゴ虫にもおかげさまを忘れてはいけない。生態系の考え方は自然のありがたみを理解し、「自然へのおかげさま」である・・・」と、ということでした。

ビオトープは、人間も自然界の一員であること感じさせてくれる場所です。人が集まる公園の中のトンボ池は、人の影響をもちに受け、なかなか上等の自然にはできませんが、自然と人間のあり方を考える場所として、根気よくつき合っていきたいと思います(坂本 郁子)。

# 鳥とめのない話

11月30日、エコポリスセンターで「身近な野鳥たちの都市生活」(オオタカからカルガモまで)というお話を、都市鳥研究会代表・日本野鳥の会東京副代表の川内 博先生に聞いて、私は驚いた事があったので、ここに書かせていただきます。

それは、パリの緑鳥(緑鳥=都内とかに、ぼつんぼつんと残っている緑を持った公園をいう)・モンソー公園に**ミソサザイ**(=スズメ目ミソサザイ科ミソサザイ属に分類される。全長10.5cm。全身こげ茶色で、細かい模様があります。全国に分布していて、山地の溪流ぞいの藪や岩のある林などに生息しています。冬には、より低い山地や山麓の沢や岩のある林へ降りてきます。国内で観察できる野鳥の中では、最も小さい鳥の一つ。)が普通に見られるという事に驚きました。私は、40年くらい前、「長野の自然」という映画の撮影で、カメラを担いで長野の野山を歩き回って動物や鳥、昆虫そして植物を追いかけていたのです。

監督の「浅間山に朝日がさす」と言うようにかいてあったら、その1行の言葉を現す映像を撮るために、結構、重い機材を担いであっちの稜線、こっちの稜線と歩き回ってカメラを廻して、フィルムに収める、そんな仕事をしていたのです。私は、動植物の専門家ではないので、鳥についても、それほど専門の知識はありませんが、ミソサザイを見かけたのは、深山幽谷の奥深くでしか見ていませんでした。そんなところでしか、見ていなかったのですから、まさか朝からジョギングしたり、家族連れで遊んでいる場所に、飛んで来るなんて、信じられない事です。モンソー公園は、9haで広さは六義園と同じくらいの公園とのこと、まわりの家々は、石作りなのに、どうしてこのような場所に飛んでくるのか、もともと水辺が好きな野鳥くらいの事は、知識として持っていたのですが、スズメより小さい鳥で、営巣するにも、木の枝に苔を敷き詰めて生きている鳥である。そのような鳥が、これほどまでに人を恐れないという事は、野鳥に対してフランス全体がやさしく、自然を大切にしているのかなと密かに思うのです。野鳥にしても、生息数が多くなければ、このような公園にまで現れることが、可能にならないのではないだろうか？

餌とか外敵とか、生息環境も見られれば、いろんな事が判るのかな？

あと一つ、ヨーロッパミソサザイが、図々しいのか、人馴れしているのか、あるいは、低地に順応している鳥なのか？日本のミソサザイとは、少し違う鳥なのでしょうか。

まあ、私のような素人が勝手に推測しているので、ご勘弁を願います。

ほかには、**クロウタドリ**(=スズメ目ツグミ科ヨーロッパ全土、アフリカの地中海沿岸から中近東、インド、中央アジア南部、オーストラリア東南部、ニュージーランドに生息する。体長約28cm 大型ツグミの一種。雄は黒いからだに黄色いクチバシ。目の周りが黄色い。雌のからだは雄に比べて淡く、クチバシや目の周囲の黄色い部分が目立たない。)とか、**ヨーロッパロビン**(=ヨーロッパコマドリとも云う、スズメ目ヒタキ科ヨーロッパで一般的な鳴禽類の一種である。体長は、12.5~14cmと小さく、雌雄同色、顔から胸が赤橙色なのが特徴である。その周囲は、やや青みがかかった灰色に縁とられている。腹の色は白色だが脇のあたりは褐色みを帯び、頭から背にかけては灰色がかかったオリーブ褐色で、腰から尾は、それより、やや明るい茶褐色である。翼は黒褐色で、次列風切と三列風切の外弁はオリーブみがかっている。クチバシは黒、足は暗褐色。)や、**ズアオアトリ**(=スズメ目アトリ科全長約16cm。雄は顔が黒く、頭上から後頭、側頭部にかけて青灰色。顔から喉、腹にかけては、茶色だが、下部にいくにつれて、淡くなる。腰

は緑褐色。雌は全体に灰緑色である。ヨーロッパ全域とロシア西部、トルコ、シリア、イラン西部、アフリカ西北部などで繁殖し、北方で繁殖した個体は、冬季にアフリカ北部、中央アジア、ロシア西南部などに渡って越冬する。日本では、迷鳥として、1990年に北海道利尻島で1羽の記録があるのみ。)のきれいな囀りが響きわたる公園には、行けるものなら、行ってみたいくなりました。(囀りは、PCで聞いてみてください。便利な時代になったものですね。)

鳥とめのない話しのついでに、手乗りスズメの話も出ていたので。

4、5日前の新聞に載っていた記事に、「恐怖の記憶」が遺伝する？というのです。米エモリー大学の研究者は、ネズミに化学物質アセトフェノンのにおいを嗅がせて電気ショックをあたえた。アセトフェノンはアーモンドやサクランボに似たにおいがする。実験を繰り返すとネズミはにおいをかいただけで痛みに身構えるようになる。これだけなら、よく知られた条件反射だ。研究グループが電気ショックを学習したネズミの子どもを調べたところ、アセトフェノンのにおいをかいただけで反応する傾向がみられた。学習していないネズミの子らと比べると、においに対する反応が敏感だった。この現象は孫の世代にもみられたという。学習した親ネズミとその子孫では脳の神経細胞にも変化がみられた。アセトフェノンのにおいを感じるレセプター(受容体)が、普通のネズミよりふえていたのだ。この実験結果をエモリー大学の研究者らは「恐怖の記憶」が子や孫に伝わったことを示唆したと解釈する。ただ、仕組みはわかっていないとも論文に明記した。フランスの生物学者、ラマルクは19世紀初めに唱えた生物進化に関する仮説で「獲得形質の遺伝」を主張した。キリンの首が長いのは何世代もの間、キリンが高いところへ首を伸ばす努力をした結果だとみた。祖先の経験や学習の結果が遺伝することが生物進化の原動力のひとつだと考えた。しかしラマルクの仮説は、生物学の発展のなかで否定された。進化は突然変異の中から生存や生殖に有利なものが自然に選択されて起きる今は考えられている。親が獲得した経験は遺伝しない。これが定説だ。近年「エピジェネティクス」と呼ぶ現象が注目を集めている。遺伝子自体には変異がなくても、遺伝子の集合体であるDNAに他の分子がくっつくことで遺伝子の働きが制限されることがある。研究者らはエピジェネティクスが今回の実験に関わる可能性を探っている。この実験からは電気ショックの経験がどうやって細胞レベルにおける何らかの変化をもたらすのかはわからない。国立遺伝子研究所の五條堀孝教授は「もし本当ならラマルクの再評価になりうるが、現状では証拠が足りない」とはなす。(日本経済新聞・編集委員滝順一) 参考 日本のスズメが田んぼの害鳥として、昔から人を見たら逃げるという事も、ましてや、手乗りスズメなどということは、絶対に考えられないことではないだろうか。幾百年に渡って、伝えられている、この遺伝子にも、何らかの影響があるのではないだろうか。人間生きていくうえで、アンテナを延ばしていると、いろいろ面白いことが、判ってくるもんですね。いくつになっても(山田 元一郎)

## 観察と活動の記録

### 11月16日(土) バッタ広場実生の移植作業

バッタ広場を草地として維持するための3年ぶりに更地にする作業に先立つ準備の作業。周囲のロープ柵は作ってたった2年で杭がグラグラになった。なぜか。その理由はバッタ広場の周囲は実生木やササの根がびっしりで、杭が入る状態でなかったため、既存杭の穴を利用したが、杭

に巣くっていたシロアリに早々とやられたため。我々の力では杭を使った柵の作り直しはむずかしいので、境界を生け垣でつくることにした。

### 1月23日(土) バッタ広場実生の移植作業(続き)

バッタ広場の周囲を生け垣風に実生木で囲むため、実生を移植。晴天続きで、橋田さんが水を入れた4リットルペットボトル3本を担いで水やりに通った。定着しただろうか。



写真左：この冬に木も枯れ草も笹も全部刈って更地にします。自然の管理として違和感があるが、こうしないと草地が森になってしまうため。右はバッタ広場の周囲の境界を生け垣にするため実生木を移植する作業。

### 1月30日(土) 講演会 身近な野鳥たちの都市生活 オオタカからカルガモまで

講師：都市鳥研究会代表・日本野鳥の会東京支部副代表川内博先生(エコポリスセンター共催)

### 1月21日(土) 赤塚トンボ池の清掃

この日、池の水はあるが雨が少なく湧水は流入しない。枯れ草、クズのツルなどを取り除く(写真右)。植えたセリはほとんど消えてしまった。猪鼻さんが植えたショウブが繁茂して負けたか、カルガモやザリガニが食べたか。

### 1月18日(土) バッタ広場作業

実生木を切り、柴を束ねて片隅に置く。カブトムシが住める空間を狙っている。



# 活動のお知らせ

**運営委員会**：1月25日(土) 2月22日(土) 12:30~13:30

作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。

連絡先；坂本(090-4618-1295)

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく**

日時：3月15日(土) 12:30~

**活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで**

## 活動予定いろいろ

### 1 赤塚ピオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

いずれもトンボ池前集合。

トンボ池については、来年度の再生工事の準備として、池周りの常緑樹を切って、野草の生育を促し、作業がやりやすいように不要なものを片付けたりします。バッタ広場は半分を徹底柴刈りして更地にします。木は縄で縛ってカブトムシの住処に、草等はそのままにします。

1月25日(土) 10:00~12:00 バッタ広場の徹底柴刈り

2月22日(土) 10:00~12:00 バッタ広場の徹底柴刈り

3月15日(土) 10:00~12:00 トンボ池周りの常緑樹切りと草刈

### 2 谷津干潟に行きませんか

2月15日(土) 10時30分頃、谷津干潟自然観察センター集合(屋内で暖かい)

京葉線南船橋駅下車進行方向の左側の高速道路に沿って千葉方面に進むと干潟が見えるので、干潟に沿って道なりに行くと自然観察センターに出ます(徒歩20分)。

### 3 日暮台公園樹林地の観察プラス

(樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りなど)

2月8日(土) 3月8日(土) いずれも10:00~11:30 日暮台公園前集合

### 4 環境なんでも見本市に出展

2月1日(土) 2日(日) 10:00~16:00 エコポリスセンター

### 5 梅まつり

梅まつり30周年記念行事で、池の前を使用できないため今年は参加しません。

#### ピオトープ管理のボランティア大歓迎

生き物のすめる水辺(トンボ池)や草地(赤塚公園バッタ広場)などの管理作業を応援していただませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円；振込先は表紙に記載)